

【第15回年次大会 研究発表 要旨】

日本のインターネットにおける言語攻撃とジェンダー

ヴォランスキ バルトシュ

広義の「言語攻撃」とは、意図的に相手を傷つける言語行為である。意味における攻撃性以外にも、声量とピッチによって攻撃性を表すことも可能であり、また談話構造の視点から「口を挟むこと」等も言語攻撃として捉えられる場合もある。しかし、本研究はインターネットの書き言葉に焦点を当て、主に以下の三つの特徴のいずれかが当てはまる言語行為を分析対象とする。

- (1) 相手の主張ではなく、相手自身のアイデンティティーを責めること
例 「アホとしか言いようが無い」
- (2) 相手が不幸な目に遭ってほしいという願望、または話者が相手を不幸な目に遭わせるといふ威嚇
例 「死ねよ！」
- (3) ポライトネスの観点から無礼な言語形式
例 「日本に住んどるなら日本のルールに従え。嫌なら出て行ったらいい。」
(例はいずれも本調査のデータからとったもの)

日常生活では、言語攻撃は人間関係を壊し、極端な場合には法律上の問題にもなりうる。ところがインターネットコミュニケーションを行う場合は、相手と対面せず、匿名性が高いことが多いため、個人情報や隠しさえすれば、言語攻撃を行った者に影響が及ぶ可能性は低いため、攻撃が生じやすいと思われる。

言語攻撃とジェンダーの関わりに関しては、物理的攻撃をする、つまり暴力を振るうのは、女性より男性であることが多いという研究結果および統計データは数多く存在するが (Österman et al. 1998 等)、言語攻撃においては性差の問題はより複雑である。言語使用においても男性の方が攻撃的であるという報告 (Li 2006) もあるが、性差が存在しないという研究結果もある (Ybarra & Mitchell 2004 等)。また、頻度以外にも、言語攻撃の特徴に性差がある可能性もある。同様に「相手を傷つける」表現の中でも、男性は威嚇、暴力的な表現をよく用いるが、女性は相手を仲間の中から排除するという間接的言語攻撃ストラテジーを用いるという研究結果がある。例えば、8歳から15歳までの子供を対象にした調査では、女性より男性が卑語を用いて攻撃を行ったことが比較的多かったが、女性の方が攻撃対象について嫌な噂をたてるが多かった。(Björkqvist et al. 1992)

日本のネット上の言語攻撃に関しては、中学生・高校生の間起こるネットいじめが問題として取り上げられ、その問題を教育学や心理学の視点から論じた研究はあるが、コミュニケーションにおける言語攻撃の特徴を対象にした調査は少ない。

本研究では、日本のウェブサイトにおける言語攻撃の性差の実態を調べた。世界でもっとも人気があるソーシャルネットワーキングサイト(SNS)「FACEBOOK」の登録者が書き込んだコメントをデータとして使用した。ウェブサイトのコメントを分析する際、インターネットコミュニケーションの高い匿名性によって話者の性別は不明で、性差を特定することが不可能になる場合が多い。しかしFACEBOOKにおいては、登録する際に必ず本名を入力し、性別を公開しなければならない。FACEBOOKのポリシーでは、登録された個人情報に虚偽が発見された場合、ユーザーアカウントは削除処分になる。なお、FACEBOOKは主に知人や家族と交流するために利用さ

れているので、虚偽の個人情報を登録すれば利用者本人の身元を確かめることができないため既知の人との交流は難しいと考えられる。以上の理由によって、FACEBOOK で公開される個人情報における虚偽の可能性は他のウェブサイトと比べて比較的低いと思われる。

今回、合計 1773 件のコメントを分析対象としたが、女性によるコメントは 617 件、男性によるコメントは 1156 件であった。言語攻撃を含むコメントは女性の場合では 51 件(全体の 8.2%)、男性の場合では 110 件(全体の 9.5%) であった。男性の攻撃的な発言の割合はやや高かったが、データの全体を見ると著しい性差が存在するとは言えない。

しかし、話題によって参加者の性別割合と言語攻撃の割合が変わってくる可能性がある。「浮気」という話題の場合、データ全体と異なって、女性からのコメントがかなり多くなり(女性 156 件、男性 90 件)、女性の攻撃的なコメントの割合もやや高かった(女性 18 件、156 件の 11.5%、男性 9 件、90 件の 10%)。また、本調査に現れた言語攻撃のほとんどが会話参加者同士の間ではなく、刺激的な話題に関係する第三者に対して行われている。たとえば、前述の「浮気」の場合、攻撃の対象は「浮気をする人」だが、多くのコメントは浮気で傷ついた女性によって書き込まれており、この話題は特に女性に刺激を与えやすいものであることが分かる。

[参考文献]

- Björkqvist, K., Lagerspetz K.M.J., Kaukiainen, A. (1992) "Do girls manipulate and boys fight? Developmental trends in regard to direct and indirect aggression" *Aggressive Behavior* 18.2. pp. 117-127.
- Li, Q. (2006) "Cyberbullying in schools: a research of gender differences" *School Psychology International* 27.2, pp. 157-170.
- Österman, K. et al. (1998) "Cross-cultural evidence of female indirect aggression." *Aggressive Behavior* 24.1, pp. 1-8.
- Ybarra, M. L., and Mitchell, K. J. (2004) "Online aggressor/targets, aggressors, and targets: A comparison of associated youth characteristics." *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 45.7, pp. 1308-1316.

(WOLAŃSKI Bartosz・九州大学大学院博士後期課程)